



Title	本會記事
Author(s)	
Citation	懷徳. 1933, 11, p. 127-132
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88902
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

衛氏逝去せらる。

▲昭和八年の講義講演 本年の講義講演如左

定日講義

月曜 孟 子 大塚 講師

清代樸學大師列傳 吉田助教授

火曜 靖 獻 遺 言 大塚 講師

老 子 岡山 講師

水曜 論 語 秋月 講師

水 滸 傳 吉田助教授

木曜 古 事 記 阪倉 講師

尺 牘 灌 鈔 岡山 講師

文科講義

金曜 心理學概説 岩井 講師

近 思 錄 秋月 講師

陸 游 詩 鈴木 講師

現代獨逸文學概論 成瀬 講師

土曜講演 每週土曜

史眼に映じたる現代歐洲 (自一月至三月)

時野谷博士

宇宙の構造 (自一月至三月) 荒木 學士

日本語原學概論 (自四月至六月) 新村 博士

楠木正成 (自九月至九年三月) 中村 學士

日本國家史概論 (自九月至十二月) 牧 學士

通俗講演 毎月第三火曜

手形法改正の話 (自一月至三月) 大隅 學士

政治の話 (自四月至六月) 黒田 學士

相續の話 (自九月至十二月) 近藤 學士

本會記事

▲昭和七年十月八日 恒祭、會誌刊行

記念祭典を舉行せらる、會員、野口幸雄、岡田

玄碩、久保田昇、酒井全太郎、山本檜信の五名

十年繼續聽講の好學章を受く。會誌第十號を刊行頒布する。

▲十月二十六日 清浦伯爵訓話

午後二時、清浦伯爵來堂せられ、講堂にて聽講生に訓話せられる。要旨は左の通りである。

懷德堂の事は、かねがね聞いてゐる。今日まゐり懷德堂の古へをしのぶ事が出來て満足に思ふ大阪のやうな土地で、今日のやうな時勢に、此の懷德堂に來て、御講習になつてゐるのを喜ぶ。澁澤榮一翁もいつてゐる、算盤と論語とはならば行はれて悖らないと。信といふことが大切である。論語は我が師なりといふ言葉もある。業務もおありだらうが、かたはら能く御考究なさることを希望する。

▲十一月三日 見學

吉田、岡山兩先生を初め一行四十餘名、京都北白川の東方文化學院京都研究所及び住友男爵別邸の古銅器を參觀する。

▲十二月十五日 茶話會

午後七時より理事江崎先生の 後光明天皇に就ての講話あり、後茶話會に移り、同先生より皇陵巡拜會の説明なごありて十時すぎ散會、出席者約四十名。

▲昭和八年一月一日 年賀

年賀式あり、吉田、岡山兩先生、會員數名參集

▲一月十九日 茶話會

午後七時より評議員勝本先生の所感、及び吉田先生の「懷德堂夜話」に就ての講話あり、江崎先生また思想問題に就て所感を述べられ、色々質問應答なごありて十時すぎ散會。

▲四月七日 總會、大塚、阪倉兩先生歡迎會

午後七時より堂友會總會を開催、會計及び庶務の報告あり、幹事を改選す。引續き大塚末雄阪倉篤太郎兩先生の歡迎茶話會を開く、出席者四十名。「願くば其々に協力して盡力致されんことを願する」と今井先生の御紹介あり、「其々に切磋琢磨して向上の一路を辿つてゆ

きたい」と大塚先生の御挨拶あり、阪倉先生は餅は餅屋といふ諺があります、日本人は餅は餅屋といふ偏見を持つてゐる。又他人の花は赤い、自分の土地のものより西洋の文學がいゝといふ間違つた考を持つてゐる。

此の懷德堂へ、業務の餘暇に和漢の學問をなさるのは私は非常にうれしく思ふ。大阪の人達に、學問を尊重するやうに盛んにす

るやうに、此の土地に生れた者として努めたいと思ふ。大阪の商工業のもつと盛んになり、常識として文學とか哲學とか誰でも知つてゐる時代が必ずや來るだらうと思ふ。たのもしき御挨拶あり、「枝葉をつければよい」との今井先生の仰せに、色々希望を持つ出す者などありて和氣靄々裡に閉會する。

▲四月二十三日 故松山先生墓に參詣

今井、吉田兩先生を初め會員十數名、明石市五分一町本立寺なる故松山先生の墓に詣で回向する。

▲五月七日 藤樹神社參拜

藤樹神社參拜の案内狀を出せしに、希望者案外に多く約四十名の同志を得て朝八時、塵煙につつまれたる大阪をあどにし、大津にて高

瀬、大塚兩先生を初め、京都より參加の人々を迎へて江若鐵道に乗換る。右に左に殆ど一面の若葉を眺つゝ北進すること三十分にして機動車は湖畔を走る。水清くして湖底の石を數ふべく、近江富士など對岸の山々霞みて見ゆるもうれし。安曇驛にて下車、東へ行くこと十町にして右折、遙か亭々と空に聳ゆる松數株、石の大鳥居など見ゆるが藤樹神社である。扁額は東郷元帥の書、見事にもなされてゐる。傍なる標石は杉浦先生の筆である。邊陲の神社としては餘りに結構の堂々たる社前に集ひ、社司に導かれて神前に玉串を捧げ社務所にて休息、「坂本寒源……遠く海外に信用を博せし者あるに至る」廣大なる神徳に就て高瀬先生の御講話を承る。特に許されて皇后陛下のまだ良子女王であらせられた時分に

下された「中江藤樹」といふ御作文をまのあたり拜し、其の神々しき御筆跡、條理を盡したる御文章を有難く拜し奉る。行くこと一町にして藤樹先生の墓あり、白き藤美しく咲く、五十年祭に門人の建立せしものといふ。菩提寺に安置の木像の生けるが如き御姿を拜す。行くこと數町、道路の左側に年古りたる藤あり、先生の遺愛の藤なり、藤樹書院には遺書をはじめ生前使用せられしといふ孝經、酒壺、暖簾、衣服など展覽してある。再び社務所に戻りて雀蛙の聲を靜かに聞き、山顛に白雪未だ消ぬぬ比良の山高きを仰ぎ、青葉に包まれた農村を見渡しつゝ、藤樹先生の昔をしのぶ。歸途、綱齋先生の墓に詣ぶるあり、或は白鬚神社に參拜するものあり、暮れゆく湖水の絶景を心ゆくばかり味ひつゝ各

々家路を急ぐ。

▲六月四日 笠置登山、恭仁山莊訪問

午前九時、笠置驛到着、一行四十餘名、笠置山に登る。山中の史蹟順覽後、笠置寺へ引返し、中村先生の講演を聴きて下山、加茂驛下車、内藤先生の恭仁山莊訪問、宋元版内外典の展覧拜見後、「解脱上人」の御話を拜聴して辭去、海住仙寺に登り堂塔拜觀、其の建築に就て中村先生の説明を承り、恭仁宮趾にて中村先生の臨地講演あり、六時、加茂驛發、歸阪する。

▲七月一日 吉野登山

吉野山竹林院にて一泊、翌朝、中村先生の臨地講演あり、子守神社へ登り、また如意輪堂を參觀、後醍醐天皇陵に參拜する。

後醍醐天皇は御存世中御讓位のことなく天

皇としておかくれになつた。その後また沙汰やみになつてゐたのを、明治天皇に至つて御存世中御讓位のことなきに至つた。思召が實に大きい。こんな所でおなくなりになつた御心中さこそと拜察し奉る。勤王の志士が延元陵にお詣りして感憤する。明治天皇に至つて復興する。思想の淵源は面白ところにある。

など御講話あり、吉水神社、藏王堂、吉野神宮順拜、それぞれ中村先生の御説明あり、吉田、岡山兩先生を初め參加するもの三十名。

▲九月二日 天野山、觀心寺兩史蹟見學

午後五時難波驛發、天野山金剛寺にて宿泊、月光淡く堂塔を覆ひ、懐古の情を禁ずる能はず。三日早朝、御病氣なるに特にお越し下されし中村先生を迎へ、十時頃より天野殿にて寶物

拜觀、金堂にて大楠公を初め楠木氏一族の往復文書を中心に、中村先生が「これ一通で後醍醐天皇の御政治がわかる一また「百萬言いふてゐるより國民教育だ」など、御説明あり、光嚴天皇御分骨所を拜し一行自動車にて觀心寺に至り、特に請ひて楠木氏一族の文書を拜觀、本堂に參詣、後村上天皇陵を拜し、楠公首塚に詣づ。社寺建築の説明を承り、寶物館にて見學、中院を觀覽、寺務所に於て休息、河合寺に立寄りて歸る。理事木間瀬先生を初め三十餘名參加する。

編輯を終へて

山本 楯 信

昨秋、前號刊行の際、國步艱難を絶叫して以來の過去一年は、我が日本國として誠に光輝ある

一年であつた。自主獨徃、我が日本民族の意氣、天下を呑むの慨があつた。全く 祖神の御加護、陛下の御稜威によるが、また國民一致の賜である而して時は一九三五年に向つてまつしぐらに進みつゝある。勝敗は最後の五分間に決する。油斷大敵である。郊外に散策するにつけても、唯遊覽をのみことゝすべきでない。國史の泰斗、中村先生の御指導を仰ぎ、昨年は、大阪城によつて想起せらるゝ英雄、豊太閤の遺蹟を廻りて其の雄圖を憶ひ、本年は、金剛山下に、忠勇義烈の權化、大楠公の遺蹟を尋ねて六百年の昔をしのび、斯界の權威、高瀬先生に御紹介をお願いして藤樹神社に詣で、近江聖人の餘澤に接せんと計畫する、亦意義なきにあらず、發起者の意に賛し每回行を共にするもの少きも三十名を下らず、諸先